

Contents

\*\*\*\*\*

特集：シミュレーション小説・安倍外交のサプライズ	1p
<今週の”The Economist”誌から>	
”A team” 「チーム安倍」	7p
<From the Editor> 「XX内閣」	8p

\*\*\*\*\*

特集：シミュレーション小説・安倍外交のサプライズ

今週号でお届けするのは、筆者が9月27日付けの「時事トップコンフィデンシャル」に寄稿した同名の小文です。実際の締め切りは9月22日でしたから、かなり前に書いてしまっているわけですが、「首相就任早々の中国、韓国の電撃訪問」などは見事的中しているので、少しは威張っても許してもらえましょう。

もっともここに描いた世界は、多分にデフォルメしたものですから、そこは割り切って読んでいただかないと困ります。まあ、本誌の古くからの読者には、言わずもがなのことではありますけれども。

10月6日、東京・総理官邸

夕刻の定例記者会見を済ませた安倍晋三は、総理執務室の椅子に深く身体を沈めた。誰もいない静かな室内で、今日の記者とのやり取りを振り返ってみる。内心、「やったな」という満足感がある。

外務省が電撃的な中国、韓国との首脳会談の予定を発表したことで、メディアは大騒ぎとなった。「安倍新首相は、初の外遊先に北京とソウルを選ぶ」というニュースは、今夜のトップニュースとして報道されるだろうし、世界的にも好感を持って迎えられよう。とりあえず、これで新首相のことを「危険なタカ派」と呼ぶことは難しくなった<sup>1</sup>。

初の外遊先にワシントン詣でをすることは、もとより安倍の想定外だった。そうでなくて

---

<sup>1</sup> 最初に「安倍氏が10月にも日中首脳会談 代償には台湾切り捨てカードか」と報じたのは、9月13日付の月刊誌「FACTA」のメルマガだった。

もブッシュ大統領は、11月7日の中間選挙に忙殺されている。となれば、初の外遊は11月にハノイで行われるAPEC首脳会議となり、中国、韓国との首脳会談もその機会に行うのが自然な流れとなる。しかし、それまで待つのも芸のない話だ。さらにAPECでは米、口、豪、東南アジアの国々など、非常に多くの首脳会談が行われるので、印象が埋没してしまう怖れがある。

小泉政権下で「次の総理」を意識し始めた頃から、水面下で息の長い日中間の交渉が始まった。「安倍新首相は、初の外遊先に北京を希望している」この申し出に対し、中南海では相当な激論が交わされたようだ。おりから米国経済の減速に伴い、夏頃から中国の輸出に息切れ感が出始めたことも、「対日関係改善」の必要性を高めたようだ。ともあれ、「受諾」の答えが出たことは、いろいろな要素があったとはいえ、最終的には安倍自身の「運」であったといっていいい。

日中首脳会談開催の動きに慌てたのは韓国政府であった。「頭越しの日中和解」が進めば盧武鉉政権は立場を失うし、北朝鮮問題の行方も微妙なものになる。急きょ日韓間の交渉が行われ、土壇場で「北京の前にソウル訪問」が決まる。しかも訪韓、訪中の日程は、それぞれ20日、21日となり、ちょうど10月22日に行われる統一補欠選挙にぶつける形になった<sup>2</sup>。自民党にとっては思わぬ儲けものである。

テレビをつけてみると、報道番組が先ほど収録したばかりのぶら下がり会見を放映していた。画面に映し出された安倍首相は、やや早口であるし、切り口上に聞こえてしまう。後で世耕弘成広報担当首相補佐官が顔を出して、「もう少しゆっくりと話していただけませんか」と口うるさく言うかもしれない。

卓上の電話が鳴り、秘書官が「谷内外務次官がお見えです」と告げた。今夜は、経団連の御手洗会長との会食に出かける予定だが、それにはまだ20分ほどある。わずかな時間を縫って、長身で色白の外交官が姿を現した。

「9・11」同時多発テロ事件で官邸が大揺れだったときに、安倍が官房副長官、谷内が外務省総合外交政策局長として、国際政治の荒波を共にくぐって以来の信頼関係がある。今回の訪中、訪韓についても、谷内はひとかたならぬ努力を重ねてくれた。しかし、その件に関する打ち合わせは、先ほど終えたばかりである。今度は何の用事かと不思議に思ったところ、谷内はA4版の冊子を取り出し、デスクの上にそっと置いた。

「先ほど、『アーミテージ・レポート2』<sup>3</sup>が公表されましたので、お届けに参りました。外務省で仮訳をつけておきましたので、後ほどご覧ください」

「ほほう、もう出ないんじゃないかと心配していたよ」

2000年10月に発表された「アーミテージ・レポート」は、後にブッシュ政権の対日政策の青写真として、日米関係に絶大な影響を与えた。その続編が準備され始めてから随分になる

<sup>2</sup> 実際には10月8日日中首脳会談、10月9日日韓首脳会談という運びとなった。

<sup>3</sup> 筆者が得ている感触では、今月中にも発表となるのではないかと。ただし前回ほど超党派のメンバーではなく、また今回は実際に政権内部にいるメンバーも少ないので、影響力はある程度限られたものとなるだろう。

が、発表は何度も延期されてきた。しかもアーミテージは、CIA 職員実名漏洩事件で民事訴訟の被告となっ てしまい、一時は発表を危ぶまれたほどである。

「新政権の発足前に出すと、アメリカが日本に注文をつけるように見られるので、しばらく待っていた模様です」

「なるほど、彼らしい配慮だね。で、どんなことが書いてあるの？」

「冒頭で2020年のアジアの姿を描き、その上で日米がどのように取り組むべきかを提言しています。中国や韓国の指導者にも読んでもらいたいと思っているのでしょう」

「ありがとう。後でゆっくり読ませてもらうよ」

会食に出発する時刻が近づいている。安倍はふとペンを取り出し、デスクの上のメモ用紙に何事か走り書きをした。

「実は、ちょっとしたサプライズ人事を考えていましてね」

黄色いメモ用紙が谷内の手に渡った。

「あなたが困ると思われるようなら、この場限りのジョークとして忘れてください。でも面白いと思われたら、ひとつ調整に汗を流していただきたい」

「これは……」

「1行目の人事は、私の方から本人の意思を確認してある。あとは外務省の現場の対応次第です。2行目の人事は谷内さんの仕事になります。どうでしょうね？」

メモ用紙を凝視する谷内の細い目が、眼鏡の奥で大きく見開かれていた。

## 10月21日、北京・人民大会堂

胡錦濤国家主席との会談は、通訳だけを同席させる形式で行われた。

「今からちょうど21年前に、私はこの場所に来たことがあります」

最初は安倍の側から切り出した。

「そのときは、父の安倍晋太郎外務大臣に随行する秘書官として、でした。1985年8月15日に、中曽根首相が靖国神社を公式参拝しましたが、父の仕事はその後の日中関係を調整することでした」<sup>4</sup>

胡錦濤が言葉を返した。

「よく知っています。私はそのとき安徽省の共青同最高指導者から、中共中央委員会の常任委員に昇進したばかりでした。ときの胡耀邦総書記が抜擢してくれたのです。ところが胡耀邦同志は、2年後に失脚してしまいます。理由はご存知のことと思います」

「日本と親密過ぎると、党の長老たちから批判を受けたからでしょう」

「それだけが理由ではありません。しかし中国においては、日本との関係はひとつ間違えば

---

<sup>4</sup> 中曽根首相は1985年秋、安倍外相を中国に派遣する一方で、野田毅衆議院議員など中曽根派の親中派議員を通じて、中国側との裏交渉を行っていたらしい。

政治的な命取りとなります」

「よく分かります」

「少し独り言を言います。私たちが非常に気にかけていることについてです。そのことについて、あなたは何もおっしゃらないと思う。が、そのことを責めるつもりはありません」  
安倍は無言で頷いた。

「あなたは靖国神社には参拝しないだろう。本当は『行かない』と明言してほしいところだが、あなたは『行く』とも『行かない』とも言わない。さらに『行った』とも『行ってない』とも言わないという。われわれとしても、そういう人を非難することは出来ない。また、これ以上、日本の世論を敵に回したくもない」

黙って聞いている安倍の内心はこうだ。小泉前首相は年に1回の参拝を行ってきた。安倍もできればそれに準じたい。そのために、今年4月15日に隠密裏に参拝しておいた。これで年内は参拝を考えなくても良い。来年については、安倍にとっては7月の参議院選挙が勝負である。そこで大敗すれば、党内から詰め腹を切らされる。それこそ参拝どころではなくなる。だから夏までは動けない。

しかし、参議院選さえ勝ち抜けば、後は安倍政権の前途をさえぎるものはあまりない。何より、党内では安倍よりも若い世代が育っておらず、将来の強敵が見当たらない。そうなれば自民党総裁として2期6年の任期を完走する可能性が高くなる。結果として憲法改正にも手が届くかもしれない……<sup>5</sup>。

胡錦濤が言葉を続けた。

「ただし、われわれも来年秋には党大会を控えています。5年に1度の非常に重要な機会です。翌年には北京五輪も控えている。あなたが軽挙妄動することで、われわれが迷惑を被ることだけは願ひ下げだ。そういうことになれば、日中関係はまた同じことの繰り返しになってしまう」

胡錦濤は安倍の目をじっと見た。

「あなたは小泉さんとは違う。話の分かる人だと思っています。仮にもし、あなたが小泉さんと同じ事をするのであれば、かならずその前に、あなた自身が直接、私に電話をしてほしい。ノー・サプライズ、プリーズ」

「オーケー、よく分かりました」

安倍が立ち上がって右手を差し出した。

「日中関係はノー・サプライズで行きましょう。そのことははっきりとお約束する」

胡錦濤はゆっくりと右手を出して、安倍の手を握った。その目はまだ、安倍を完全に信用してはいない。

---

<sup>5</sup> こういう構図があるので、安倍政権は超短期（10ヶ月以内）で終わるか、さもなくば超長期（2期6年）となるか、いずれにせよ中途半端な政権とはならないように思える。

## 10月30日、ワシントンDC

ヴァージニア州のダレス空港に日本政府の専用機が降り立った。本来、皇族と現役閣僚以外は使えないはずの旅客機だが、降り立ったのは小泉純一郎前首相である。

小泉を乗せたストレッチ・リムジンが、目指した先はマサチューセッツ通り2520番地の日本大使館である。

大使館では加藤良三大使<sup>6</sup>以下のスタッフが前総理の到来を拍手で迎えていた。

「ありがとう。しかしちょっと歓迎が派手過ぎるな」

小泉は小声で加藤につぶやいた。

「私がこの大使館の主になったら、こういう内向きのイベントは極力減らすことにするよ。大使館も『小さな政府』でなければな」

「分かりました。それでは新任大使歓迎式典は省略して、早速、引継ぎの打ち合わせに入りますしょう」

二人はすぐに大使執務室に移動して、引継ぎ書にサインを行った。

「正直に言うが、自分に特命全権大使の仕事が務まるとは思えん。条約だとか国際儀礼のことは、事務方の諸君がサポートしてほしい。俺にできることといえば、ブッシュ大統領の話し相手になることくらいだからな」

「実は、すでにホワイトハウスから内々で連絡がきています。明日の夜、お忍びで来てもらえないかと」

「お安い御用だ。彼はあれで結構、人見知りだからな。親しい人間が周囲に少なくなって、心細いんだろう。お土産に神戸ビーフを持ってきたから、選挙戦の慰問に行ってくるさ」

「きっと喜ばれることでしょう。日米関係の維持発展にとって、これに勝る仕事はありません」

「まあ、ホンネを言わせてもらえば、ここに居る分には日本のマスコミの目も少ないし、俺はのんびり過ごさせてもらおうつもりだよ」

そう言うと、小泉新駐米大使は楽しそうに笑った。

「そんなことより、加藤さん、あなたはこれからが大変だな。日本版NSC（国家安全保障会議）の初代補佐官は重責だぞ。安倍総理のために、しっかりやってくれ」<sup>7</sup>

帰国後の加藤には、「安全保障諮問会議設立準備室室長」という役職が用意されていたのである。

---

<sup>6</sup> 加藤良三大使は小泉政権下の2001年から駐米大使を務めている。在任期間は長い、ブッシュ政権が続く間は余人をもって替えがたい、との声も高い。

<sup>7</sup> 安全保障担当首相補佐官に小池百合子衆議院議員が選ばれたのは、筆者にとっては少々意外であった。安全保障担当の補佐官は首相への絶対的な忠誠が必要となるので、選挙区に対する義務を負う現職の議員が務めるのは支障があるのではないだろうか。

## 11月19日、APECハノイ会議

安倍の発言機会が回ってきた。演台から周囲を見渡すと、米国のブッシュ大統領が上機嫌で手を振っている。中間選挙で共和党が辛くも上下両院を維持したこともあるが、昨晚の晩餐会でも「小泉新駐米大使は、私にとって最高のプレゼントだ」と繰り返していた。ロシアのプーチン大統領はいつものポーカーフェイス。胡錦濤国家主席、盧武鉉大統領は複雑な表情。アロヨ大統領やユドヨノ大統領は、日本の新首相が何を言うか興味津々といった様子である。アジア太平洋地域の首脳たちを前に、安倍はゆっくりとした口調で演説を始めた。

「皆さん、2020年には世界人口は68億人になります。そのうちアジアは56億人。アジアこそが世界の中心となります。経済成長も、物流も、資源エネルギーの消費も。そして軍事的緊張やナショナリズムの対立においてもアジアが舞台となるかもしれません。

この話をどこかで聞いたと思われたかもしれません。そうです、これは先般発表されました『アーミテージレポート2』が指摘している内容です。友人であるアーミテージ元米国務副長官から、私は報告書とともに2つのメッセージをもらいました。ひとつは『あらゆる機会を利用せよ』、そしてもうひとつは、『歴史の囚人となるなかれ』です。私は日本の首相として、この友人のアドバイスに従っていくつもりです。

そこで今日、私は安倍政権の対アジア外交3原則を発表したいと思います。それは相互互恵、未来志向、そして寛容の精神です。アジアは多様であり、活力に満ちており、絶えず変化しています。この歴史的な機会の中で、わが国は地域の発展と安定のために、微力ながら寄与していく所存です」

大きな拍手に送られて、演壇を降りる安倍首相の下へ、加藤良三安全保障会議担当補佐官が小走りに駆け寄ってきた。

「内閣情報衛星センターからの連絡です。北朝鮮が核実験に踏み切る兆候があります<sup>8</sup>。CIAとも意見交換しましたが、3日以内に80%の確率という結論です」

来るべきものが来た。一瞬、安倍の表情が曇ったが、考えてみればここまでが順調過ぎたかもしれない。安全保障上の挑戦を受けるかもしれないことは、7月5日の弾道ミサイル発射のときから分かっていたことだ。

「安全保障会議が作ったシミュレーションのファイルを見せてくれないか」

「闘う政治家」としての安倍新首相にとって、これからが真の正念場となる。

(本稿は一部現実の設定を踏まえたフィクションです)

---

<sup>8</sup> 10月3日～4日、北朝鮮は「核実験を行う」旨の宣言を実施した。この声明は合計6回、北朝鮮国内向けにも報道されており、簡単に引っ込みがつかないことだけは間違いない。「どうせまた交渉のための駆け引きだろう」と高をくくるのはやめた方がよさそうだ。

## <今週の”The Economist”誌から>

”A team”

Asia

「チーム安倍」

September 30<sup>th</sup> 2006

\* とかく「ナショナリスト」という観点から報道されがちな安倍首相は、”The Economist”誌のアジア欄ではこんな風に分析されています。

<要旨>

先週、自民党総裁選挙に勝利した安倍晋三は、9月26日に国会で選ばれて小泉純一郎の後を引き継ぐこととなった。新たなリーダーがすみやかに新政府を発表した。

小泉氏による因習破壊の日々は、日本の正常な政治からの逸脱であったと見る者にとっては、安倍氏の任命はわが意を得たりかもしれない。安倍氏の自民党総裁就任を助けた党の大物たち 小泉氏は距離をおいたものだが が主要なポストを得て、かつて小泉が破壊しようとした派閥に、役職がきれいに分配されている。73歳の尾身幸次は、早期から安倍氏の熱心な支援者となり、財務大臣を射止めた。財政均衡派ではあるが、改革派というわけではない。安倍自身が属し、党内最大派閥の森派からは4人が入閣し、丹羽 - 古賀派も4つのポストを得て、その中には小泉政権下での気の毒な金融担当相であった柳沢伯夫や、戦争犯罪者も靖国神社に祭られるべきだと考え、夫婦別姓に反対する高市早苗も含まれている。その彼女は男女共同参画大臣である。

これらの指名は、市場重視の改革派たちの心胆を寒からしめている。しかし党の派閥や老齢の政治家たちに報いる一方で、安倍氏は重要ポストに強力な改革派を配置している。特に元日銀マンで安倍の同志である塩崎恭久は、安倍自身が勤めてきた官房長官という要職を得た。強固な市場主義者である塩崎は、竹中平蔵さえも官僚機構に嫌われて妥協したと考えている。加えて安倍は学界から、竹中の弟子筋である大田弘子を経済担当大臣に指名した。彼女は経済財政諮問会議を運営することになる。

安倍はまた伝統的に弱い官邸の中に、経済や安全保障政策を検討する補佐官のチームを作って権限を集中させた。彼のモデルは米国における国家経済会議や国家安全保障会議である。ここでも彼は聡明な現実派を指名している。根本匠はもう一人の同志であり、経済政策を担当する。安倍氏はまた、党による妨害を防ぐために党幹事長に小泉改革のキーマンであった中川秀直を選び、強力な支援者とした。政策立案に力点を置いていることは間違いない。

外交問題では、安倍氏は自分と似た保守派である小池百合子を登用した。54歳の元ジャーナリストは新設の安全保障担当補佐官となったが、これまで北朝鮮への制裁を強く支持している。総裁選で安倍氏に敗れた麻生太郎は、外相に留まった。麻生氏は7月のミサイル発射以後、北朝鮮への国際制裁の推進で安倍氏を助けた。しかし彼はまた、中国との和解の首脳会談を早期に追い求めている。

## < From the Editor > 「XX内閣」

政権発足から約10日。すでに「安倍内閣」については下記のような評価が飛び交っています。さて、どの言葉が定着するでしょう？

- 「しっかりと内閣」：安倍首相の口癖が「しっかりと」。本当は「ちゃっかり」だとか、実は「うっかり」を警戒しているのだとか、まあそんな声もあったりする。
- 「論功行賞内閣」：とりあえず御礼は早めに済ませておいて、来年7月の参院選後にあらためて本気内閣を作るという見方も。
- 「学園祭内閣」：朝日新聞から。仲間内だけで楽しそうにやっているから。特にNHKに圧力をかけたという報道で、敵対した安倍＆中川政調会長コンビが憎い？
- 「FOA内閣」：海外の金融情報誌から。"Friends of Ave"による組閣の意味。クリントン政権では"Friends of Bill"ことFOBが流行語になった。
- 「黒備え内閣」：政治学者・櫻田淳氏の命名による。顔ぶれは地味ながら、「漆黑」の甲冑を身に着けた武者がずらりと並んだ風情である、とのこと。御意。
- 「徳川幕府内閣」：某霞ヶ関関係者から。近く（官邸）は親藩譜代で固め、遠く（閣僚）は外様に与える。大切なのはもちろん前者である。
- 「反財務省内閣」：財務省OBの柳沢氏を厚生労働相、伊吹氏を文部科学相と経済財政諮問会議から遠ざけ、財務省シンパの与謝野氏は無役となり、税調会長へ。肝心の財務相には商工族の尾身さんを起用。念の入った財務省警戒シフトではないのかと。そういえば大田弘子経済財政担当相も、平岩レポートの時代から筋金入りの反大蔵省でした。

「闘う政治家」を標榜する安倍首相は、どうやら霞ヶ関の官僚機構と一戦構える覚悟であるのかもしれませんが。ともあれ、いろんな読み方ができる組閣であるようです。

編集者敬白

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記にてお願いします。

〒107-0052 東京都港区赤坂2-14-27 <http://www.sojitz-soken.com/>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)5520-2195 FAX:(03)5520-4954

E-MAIL: [yoshizaki.tatsuhiko@sea.sojitz.com](mailto:yoshizaki.tatsuhiko@sea.sojitz.com)